

Title	陽明文庫蔵「道書類」の紹介(六)『〔二十三問答〕』翻刻・略解題
Sub Title	
Author	恋田, 知子(Koida, Tomoko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2009
Jtitle	三田國文 No.50 (2009. 12) ,p.32- 53
JaLC DOI	10.14991/002.20091200-0032
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20091200-0032

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

陽明文庫蔵「道書類」の紹介(六)『二十三問答』 翻刻・略解題

恋田 知子

前号に続き、陽明文庫蔵「道書類」のうち、『二十三問答』を紹介する。これまで述べたように、陽明文庫蔵「道書類」は、仮名法語を中心に、あわせて十八種類の書物が一括されたものであり、慶長・元和年間(一五九六—一六二四)の奥書をするものが含まれていることや、とりたてて書写時期の異なるものも見えないことなどから、本書についても、おそらく同じ時期に書写されたものと推察される。

江戸時代になると、『大燈国師法語』、『一休骸骨』、『拔隊法語』など、禅宗の思想を平易に説いた仮名法語が数多く出版されるが、これらは主に在俗の信者、とくに子女、童蒙のための仏教入門書としての性格付けがなされている。これまでも紹介してきたように、いずれの仮名法語も「道書類」に含まれており、かような点からもその享受層が窺い知れよう。ここに紹介する『二十三問答』もそうした禅宗系仮名法語のひとつで、夢窓疎石(一二七五—一三五五)が観応年間(一三五〇—一三五二)に仏法の道理を道俗の問いに応じて平易に説いたものである。元和寛永古活字版をはじめ、正保二年版や慶安元年版など江戸以降の版本が数多く伝存するが、写本については、駒沢

大学図書館蔵の元和四(一六一八)年の湊兵部入道安日明岸居士筆の写しが知られている程度である。

そもそも『二十三問答』は、二十三の問答のみで終わる系統と、以下に別の法語や道歌などを付す系統とに大別できる。『道書類』にはその両系統がともに収められており、需要のほどが窺える。本書については、二十三の問答末尾にそのままつけて、同じく夢窓の仮名法語が書写されており、夢窓の歌として記される三首の道歌も含め、特徴的である。そこでは母の求めに應じて夢窓が記した(37丁裏三行目)とあり、一般に『夢窓仮名法語』と称される作品が夢窓の「御袋けんしん」の求めによるとするのに通ずるものの、その内容は異なっている。延宝二(一六七四)年刊の『二十三問答并盲安杖』(前進座真山青果文庫蔵)に、ほぼ同内容の仮名法語が確認できる。但し、管見の限りでは、現存する写本でこの系統にあるものは見いだせず、貴重である。なお、本書冒頭の目録は、諸本における配列順序と相違するが、問答自体の順序は一致しており、目録のみの誤りと推察される。書誌については、以下のとおりである。

・函架番号 近ト一七二一ト

・形態 写本。一冊。仮綴。

・寸法 縦三一・五糎。横二三・一糎。

・表紙 本文表紙共紙。楮紙。

・丁数 墨付五十丁。

・本文 半葉五行。漢字平仮名交じり。字高約二三・〇糎。

・内題 なし。

・奥書 なし。

・印記 一丁表右上に「陽明蔵」の朱額形印あり。

翻刻に際して、本文は底本に忠実を期したが、私に句読点を打つなど、読解の便宜をはかった。

注

(1) 陽明文庫蔵「道書類」の詳細については、「三田國文」連載の翻刻紹介のほか、拙稿「室町期の往生伝と草子―真盛上人伝関連新出資料をめぐって―」(『唱導文学研究』第六集 三弥井書店 二〇〇八年)、拙稿「説法・法談のヲコ絵―『幻中草打画』の諸本―」(『仏と女の室町 物語草子論』笠間書院 二〇〇八年)、拙稿「比丘尼御所文化とお伽草子―『恋塚物語』をめぐって―」(徳田和夫氏編『お伽草子 百花繚乱』笠間書院 二〇〇八年)を参照されたい。

(2) 早苗憲生氏「禅宗仮名法語集の研究(資料篇)―靈雲院本―(大応國師法語)」「(禅文化研究所紀要)一三、一九八四年三月」参照。

(3) この他、江戸初期写とされる祐徳稲荷神社中川文庫蔵「問答目錄」も、目錄の後に二十三問答が記されており、写本の伝本のひとつに位置づけられる。

(4) 陽明文庫函架番号「近ト―72―タ」の「二十三問答」は、問答のみの系統で、冒頭目錄の配列順序が諸本と一致するなど、所々に本書との異同が認められる。

【附記】

本書の閲覧ならび翻刻の御許可を賜った、財団法人陽明文庫に深く感謝申し上げます。また、本書の翻刻・考察に際して、御教示賜った、陽明文庫長名和修先生に、心より御礼申し上げます。

なお、本稿は科学研究費補助金(二〇八二〇〇四六)による研究成果の一部である。

【翻刻】

もんたうのもくろく

一 たうしんおこすへき事

一 しんのむけやうのこと

一 よしあしかきりなき事

一 よしあしのみなもとのこと

一 こんほんのむまれしなざること

一 ほとけむまれしにたまはぬこと

一 ほとけは人にかはりたること

一 ほとけむしけらとなりたること

一 まうねんによること

一 けんさいのくわをみてくわこみらいをしる事

一 さんけにつみほろふること

一 せいくわんおこすこと

一 せんこんうろむるかはりたること

一 りんしうのこと

一 ほとけほさつきやうの中にいつれおとりまさる事

「(1オ)

一こゝろのおこりをいかゝすへきこと

一わたくしのことにはあらずみなきやうもんなる事

一しやうとをねかふこと

一さんげにふたつあること

一ゑかうのこと

一なにことをもおもはずいたつらなるはあしき事

一きたうの事

一こゝろなきをほとけにすること

以上廿三もんたう

とふていはく、たうしんおこすことはいかなることとや。こたへていはく、たうしんにあき

きふかきのかはりさまくありといへとも、

あさしとまつ御こゝろへ候はんするは、世の

中のつねなきことほりをしりてみやうり

をすつるこゝろなり。きのふをすきしな

らひにけふのいのちをたのます、いるいき

いつるいきをもまたす、おひたるわかきをも

さためす、あるはなく、なきはかすそふあり

さま、さかりなる花のちる、このはのおつるに

いたるまで、あたること水のあはまほろ

しにことならず、すこしのこる水にある

うをのことくに、入日もすくれば、いのちもまた

したかひてつゝまるなり。おやこふうふもひ

とつのいききれてのち、したかひともなふ

ことなし。くらゐのたかきもたからのおもき

「(1ウ)

もやうにたつことなく、あしにはくれなひの

かをはせのありて、世におこるといへとも、夕

にはしろきほねとなる。うき世のよろつ

こゝろにまかせぬを、いよくほとけのみち

にいるたよりなるとおもひとりてみのり

をしんするをたうしんおこすと申候。

一しんのむけやうのこと

とふていはく、一しんのむけやうによりて、ほと

けにもなり、ちこくにもおつるとは、いかやうに

こゝろをもちてほとけとはなるやらん。こたへ

ていはく、よろつあしきことをなさす、よきこ

とをおこなひてほとけにはなるなり。とふて

いはく、いつれのことをさしてよきこととし、

いつれのことをさしてあしきことと申や。こ

たへていはく、よきことあしきこともかきり

なし。たゝよきあしきをなすみなもと一

をあきらむへし。とふ、そのみなもとは何や

らん。こたう、みなもとはこゝろなり、そのみなもとに

しなくあれともまつ二なり。一にはしろき

くろきをしり、にしひかしをわきまへ、よろつ

物をおもひはかる心なり。此心はまことのこゝろ

にはあらず、かりにその身にやとるなり。され

は身につくるゆへに、身なくなればその心は

なし、ちゝのほとけいてきて又うつりかはり

うせて、しはらくもとまることなし。なかるゝ

「(2ウ)

「(3オ)

「(3ウ)

水はつゝきてみゆれとも、さきの水はなかれ
ゆきて、あとより又つゝくることく、と

もしひほのをもつゝきてみゆれとも、たきゝ
あふらのちからにてあとよりつゝきまへのほのを

はきゑてうつりかはるかことし。二つには我

よ人よのへたてもなく、一ねんをこす、よ

しもあしもおもはぬ一つの心なり。この

心はほうかひにあまねくして、ひとりぬし

もなし、いてきもせず、うせもせず、うつり

かはりもせず、たれものこらすもちたるなり。

これをほとけのこゝろと申。されはよしと

もあしともおもはず、なにのこゝろもいつれ

の心もねんもなさぬを心のむげやう

によりて、ほとけになるとも申なり。この

心を妙法蓮華經とも申、一さいのほさつとも

申、一しんのほとけとも申、此心のほかにへち

にほうはなく候。此こゝろは身なくなれともう

することなし、むまるれともむまるゝことも

なし、たゝ大それなことし、此心になりて

よしあしをおもひからす、ねんのなき

を、よしあしのみなもとをあきらむとは申。

此二つの心またへちになく候。たとへは

心は月のことし、ねんをこりてしなくの

あるは、ゆひにてめをおすと、月そらに
また月ありて二つみゆるかことくそはの

「(4才)

月をとてへちに月のあるにはあらず、めを
をす人のみなしなり。そはの月をのけて、

はんの月ばかりみよとにはあらず。たゝめを
おきぬは、そはの月なきひとし。こゝろをあ

りなしとおもひ、うちよほかよとあてかひ

はからすは、二つあるへからす、せんをなしても、

しうちやくの心なく、よろつねんをおこし

物にそむくことなくは、おのつからそはのつ

きとてはあるへからす。とふていはく、

むまるゝものはみなしするなり、むまるれは

こそ、われよ人よ、とてもあるなれ。又しすればこそ、

此世にとゝまらずして、ほとけともちこくとも

入とも申。むまれもせず、しすることなしとは、

いかなることそや。こたへていはく、まことにむ

まれしすることなきをかんやうとするなり。

まつむまるゝと申は、ちゝはゝのゑんによりて

つちと水とひとかせと四つのかたらひてすかた

とす。かしらのかみ、身のけ、つめかは、しゝ

むらすしほねなどはつちなり、つはきうみちな

みた、大小へんなどし水なり、身のあたゝか

なるはひなり、身うききはたらき、いきのいて

いりはかせなり、此四つかりによりあひてある

中にしるきのあるを心とす、これはま

ことにむまれたるにあらず、あるにして

なく、なきにゝてあり、たゝかりにあるものゝ、

「(4ウ)

「(5才)

「(6才)

「(5ウ)

まことなきをいろ／＼にたとへられし、まほろし、ほのを、ゆめ、かけ、たにのひゞき、水にうつる月、水のあは、かゝみにうつるかたち、いなつまなどのことし。かくのこどく身のまことにむまれたるとみるは、まよひなり。その身にしたかふ心は、めのやまひある人の

「(6ウ)

めには、そらにいろ／＼の花など見ゆることし、そらに花はなけれども、めのやまひあるゆへにはなをみいたすことし。まことにむまれしぬることはなく候。たゞいきしにのみならず、めに見へみゞにきゞ、こゝろにうかふ事、あひ

かまへて／＼みなゆめまほろしとふかくしんすへし。まことに心もあり、まことに身もありとおもひさたむるゆへにちこくに入候。しするとみゆるもかりによりあひたる水

「(7オ)

はなかれは、身にうるほひなく、ひはなるれば、身ひへてあたたまりなく、かせはなるれば、みすくみてはたらかす、やきもせようつみ

もせよ、ついにはつちとかへす。これをまよひてしすると見る。此ときかりにその身につれ

しこゝろもつれてなし。されともまことにしするにはあらず、むまるゝときもまことのむまるゝにあらず。されは、しするとみるも、又まことにしするにあらず、たゞちゞはゞのゑんによりてうゑへかりに見へ、ゑんつくれば、もとのこどく

「(7ウ)

になるまでなり。まことにしするとおもひきたむるによりて、ちこくに入候。たとへはにんきやうをいろ／＼の物をあつめ、つくりいたしてあやつりたるは、むまれたるかことし。あやつりたるいときれてたをるれば

しするとみるかことし。まことにむまれしにもせず、むまるゝともきたるものなくしするとてもさるものなし。つちもひも

かせも水もほうかいのきなれば、とりわきてぬしなし、心もほうかいのこゝろなればぬしなし。よろつしうちやくの心なく、二ねんを

つかさるをほとけとは申なり。とふていはく、むまれしなすとはうけたまはれども、しやかほとけもまやふにんをはゝとしてむまれ、十

九にて御とんせいあり。五十ねんのあいた、みのりをときて、ついに八十にてしにたまへる。その御しやりとていまにあり。しゆしやうも

いまゝてみゑぬもむまれいて、いまゝてありしものもしにうする、いかゞむまれしなすとは申へきや。こたへていはく、むまれしするとみるは、しゆしやうのひかことなり、ひかめをま

ことゝおもひつめて、あらたむることなきちこくに入しなり。まよひのしゆしやうなれば、ほとけの御まなこにはかはるとも、此ことよりは

をうたかはす、しんしてかりにみゆるいき

「(8ウ)

「(8オ)

しにをしうちやくすへからす。たとへはゆめを
見るときには、そのゆめをゆめとおもはず。その
ことくわれらはいきしにのやみのよの中に
ありていきしにのゆめを見しほとに、むま
れしぬるをたゝまことなりとおもひつめも
よくくたへなどにて御こゝろへ候へし。

「(9才)

ふねにのりてゆくとき、きしのうつると
みゆるは、ひかことにて候。きはゝたらかす、
ふねのゆくゆへにきしのうつるやうにみ
なすなり。われらかまよひのふねにうきし
つむゆへに、ちやうなることをもうつりかはる
とみ、かりなることをまことなりとみ候。
まことにはさりきたるものなく候。ほとけと

「(9ウ)

申はいろなくかたちもなく、むまれしする
ことましまさすといへとも、此ことはりを
しゆしやうにおしゑんために、あわれみふか
くして、かりにあらはれいてたまふなり。ま
ことのほとけと申すは、しゆしやうに身のけ一
すちほともかはらず、こんほんの心おなし物
なり。へたてありとおもふは、ちこくにいる心にて候。
とふていはく、ほとけのかたちは人にすくれ
うつくしくひかりをはなち、心もしゆしやう
にかはりましまさすとそうけたまはりし

「(10才)

に、われらこときものにもおなしものとは
さらにこゝろへかたきことにて候。いかゝわきま

ゑんや。こたへていはく、ほとけとてかたちうっ
くしくひかりをはなしたまふも、ゆめのうち
にてはなをかさりたるかとし。そのかり
なるほとけさゑ、いまはめにみゑたまはず、
たゝ木にてつくり、ゑにかくはかりなり。その
ゑにかき木にてつくりたるも、こんほんの
ほとけはなるゝことなし、もるゝこともなく
ほうかいにあまねくわかこゝろ、すなはちこん
ほんまことのほとけにて、いぬ、からす、むし
までもみなほとけとひとつなり。いろかたち
あるをまことのほとけとおもふへからす。
とふていはく、ほとけなにゆへむしけらとは
なりたまひて候や。こたへていはく、ほとけと
しゆしやうとこんほんひとつなることをいまた
よくこゝろへぬ人は、此ふしんあり。むしけら
になりたれはとて、ほとけのしやうすること
なく、ほとけなれはとて、むしけらのこゝろ
はなれてもなし。ちこくのほのをにこかるゝ
ものも、ほとけの心あり。又ほとけの心も
われらしゆしやうをはなれず。たとへは月は
ほとけのごとし。くもりはしゆしやうのごとし。
くもれともこんほんの月はくらからす。また
ほとけはかゝみのごとし。うつるかけはしゆしやう
ににたり。かゝみにかけうつれとも、こん
ほんかゝみはものをきはす。されはひうつ

「(10ウ)

「(11才)

れともかゝみやけす、水うつれともかゝみぬれず。又ほとけは水のごとし。なみはしゆしやうにいたり。なみたてとも水はもとの

水にてかはらず。又心はまことのとけなり。

「(11ウ)

ねんをおこすはしゆしやうなり。ねんなければこゝろやかてほとけなり。くもりなければ

つきあきらかに、むかふものなければかゝみのかけもなし。なみなければ水はもとの水なるかごとし。

ねんなくはしゆしやうほとけなるへきをまふ

ねんさまゝいやしきかたちとなるなり。

とふていはく、まふねんによりて、ほとけむし

けらとなりたまふ、いはれ候や。ほとけまふねんある

ましきことにて候也。こたへていはく、こんほん

ほとけともしゆしやうともいふへきなもなし。

こんほんほとけとてへちにましゝて、其

「(12オ)

ほとけのこゝろにまふねんいてきて、しゆしやう

になりたるにてはなし。たゝよしなきほ

うかいにまふねんおこりてしゆしやうとなる、

ねんなくてそのまゝほうかいなれば、ほとけと

なつけたるなり。されははじめもなくおほ

りもなし。よろつの一たいとしるへきなり。人の

ゆめにむしになれとも、見る人もむしに

あらず。たゝもとの人なり。ひにいり水に

いれとも、ゆめなればまことにひにもやけす

水にもしすまず、そのことくむしけらと見

「(12ウ)

るゆめのごとし。しゆしやうことゝくほと

けなれとも、一ねんのまふしうによりてまよひ

いてゝいろゝのいやしきかたちをうるごと、

たゝゆめまほろしにて、こんほんのほとけ

しゆしやうとなりたまひたるにあらず。されは

しゆしやうとはなれてほとけましまさず。

人のゆめにいろゝの物になれとも、その人

はなれて、すと物みたるにはあらざるかごとし。

うこめくむしまてもいやしきこともなし。

ほとけをはなれたるしゆしやうあるへからず。

一たいなり。まふさうあるによりてこういんと

そへてすきし世のこうにより、此世に又むく

いありて、さまゝのかたちをうけ、六たうを

めくることたゝす、かなしまさらんや。とふて

いはく、けんさいのくわをみて、くわこみらいを

しるはいかやうなることそや。こたへていはく、くわこ

とはすきし世、けんさいとはいまの世、みらいとは

のちの世のことを申なり。此世にいのちなかく

やまひもなく、くらあもたかくみめかたちもよく

人にもちいられて、よろつともしからすくわ

ほうは、すきにし世物のいのちをころさず、人を

もかろしめす、ものをほとこし、にうわなりし

いんゑんなり。たとへは、はるよきたねをこし

らへてよくおひたつやうにつちをほり、たね

をまくゐんあれば、あきそのみよくいてくる

「(13ウ)

「(13オ)

くわあるかことし。はるはくわこ、あきはけんさいのことし。又この世にてよしなきまふねん有、しうちやくふかく、しんしんもなく、たゝ此

世のこのみに心をくたきて、のちの世を
「(14オ)

おもはされは、ちこく、かき、ちくしやうにおつるなり。

たとへは、はるもおろそかにたねをうへて、あきてをむなくするかことし。此世にてよる

つ心になはす、ますしくいやしくやまひ

のみあるは、さきの世のむくひなりとしんして、みやうねんのたねをこしらへてつちをお

かしくたねをおるせは、かならずあきよきか

ことく、けんさいにてあさましき人なりとも、みらいのことをよくかくこする人は、かならず

みらいはよかるへし。けんさいにていみしき人なり
「(14ウ)

とも、みらいのかくこなくは、みらいはあしきむくひかならずあるへきとしるされは、けんさい

のひとつにて、くわこもしられ、みらいもしら

るゝゆへなり。此世にますしくかなしきは、みらいのことをおもひて、けんさいのこゝろに

まかせぬは、なかき世のたのしみをなすへきた

よりなりとしりて、なかくへからず。又此世

におもふまゝなる人ならば、さきの世のかい

りきにていまかやうなれはとて、なからへはつへきことにもあらず、百ねんのよわひをたもつ事
「(15オ)

しみにおこることなく、しうちやくのおもひなく、みらいをかくこすへし。かやうにしりて、くわこの心おもふへからず。けんさいの心

おもふへからず。みらいのこゝろおもふへからず。とふていはく、せんこんをなすにうろのせん、

むろのせんとて、なす人の心によりて、おとりまさりのかはりあるとは、いかなることそや。

こたへていはく、人のいみしくさかへたるくにところいゑおほくもち、しからすはしやうとに

むまれて
「(15ウ)

またのちの世にも人とむまれぬれば、たのしみをきはめはやとて、きやう

をよみほとけをおかみ、てらをつくり、たうをたて、ふせをなしてくやうをのふるゝこと、うろの

のせんと申。けちゑんはくちすすきましく候共、これはわるく候。一ゑたの花をさゝげ、一ひね

りのかうをたきて、わか心はほうかいすなわちほとけなることをしんして、一さいのしゆしやう

にも此ことほりをしんしめ、ゑんをもむすひしめはやとねかいてなすをむろのせんこん

とてたつときせんこんと申なり。とふていはく、此世の心あてにてなすせんは、りやく

もあさかるへし。しやうとをねかい、のちの世のたのしみをおもひ候はんをも、わるく候はん

するとは、なにことにて候や。こたへていはく、ほとけのたねはゑんよりおこるにて候へは、う

「(16オ)

ろのせんとして、ひとむきにきらひすつへ
からず。ゑにかき、水にてつくりたるほどけを見、
一く一けのみのりをきくこと、そのゑんにくちすし
て、りやくおゝし、身になし、心におもふ

「(16ウ)

一たひそのむくひなしといふことあるへからず。
此世のうちにむくふこともあり。のちの世にて
むくふことも、よきことをなしたるも、あし
きことをなしたるも、あんくわのかるへからず。

されはつみをおそれ、せんこんをはなすへき
なり。そのうちうろのせんをなせは、そのむくひ
ありといへとも、そのちからかきりあり。のちには
りんゑにかへる事、たとへはそらをいるゆみ
のやのちからほとかりて、つゐにはおつるかことし。
むろのせんは、ひろくほうかいにひとしくて
きわまりなし。たとへはこくうのほりも

「(17オ)

かきりもなきかことし。しやうとにむまれ候ん
とねかうは、此世にしうしんふかくのちの世を
はしらぬにはまさりたりといへとも、まことのし
やうとは心のうちにあり。ゆめく心のほかに
もとむへからず。なにのねんもおこさず、よろつ
みすきかず、ありともなしともをもはず、

わか身ぬしなく、こくうにひとしく、なにの
あともなく、とゝまるところもなくして候はん人
のいたるところか、やかてしやうとにても、此世かい」(17ウ)
をはなれてへちにはしやうとなく候、かやうに

しり候へは、ねかふへきしやうとなし、いとふへきし
やはせかいもなし。まんほうたゝしんにて候、
一こゝろすなはちまんほうにて候、ほとけもしやう
とも心のほかにへちになく候。まことならざる
心をのそき候はて、まことゝおもひつめたるを
しゆしやうのまよひとし、こゝろをのそきて
まことのこゝろをしるをほとけのさと

「(18オ)

と申候。しやかによらひ五十年のあいたとき
たまひたるみのりかすおほしといへとも、たゝ
心におさまり候、なに事もとめず、そます、
よしあしとふぬしにならす候はん事

かんやうにて候。とふていはく、さんけにつ
みほろふるとは、いかなることそや。こたへてい
はく、さんけにつみほろふるといふに、二つ候。

一つにはあけくれ十あくをつくり候、その十
あくと申は、ものゝいのちをころし、物をぬすみ、
おとこは女をおもひ、女はおとこをおもひ候、これ
を三つのとかといふなり。それごとをいひ、いふ
ましきことをいひ、たはむれ人をあしくいひ、
中ことをいふ。これかくちに四つのとかなり。む
まれつきたるふんさいにしたかひて、まん

「(18ウ)

そくとおもふことなるを、あきたりもなく、よく
ふかく、いかりはらたち、とゑなくおろかなる、
これこゝろに三つのとかなり。又身のうちに六つ
のぬすひとありといふ事も、まなこ、みゝ、

はな、くち、した、身、こゝろのことにて候。めにみゆる

もの、みゝにきこゆる物、はなにかゝる物、した
にあちわふもの、身にふるゝもの、こゝろにおもふ
もの、此六つの十二によりてそひ候へは、十二の
ぬす人ともおにともなり候。此十二によりて

「(19オ)

ちこく、かき、ちくしやう、しゆらにおち候。ほかに

おにのあり、ちこくにいることなく候。かやう

のつみとかをおそれて、身にらひはいをし、
かうはなをそなふれば、身に三つのとかなし。

きやうをよみ、ほどけの御なをとなふれば、くち
に四つとかなし。しんくふかくまへに

つくりしつみとかをあらはし、こうくわい

すれば、こゝろに三つのとかなし。これ

をさんけと申なり。二つには身ともくち

「(19ウ)

ともこゝろともふんへつをなます。たゝこゝろ

の一つなくなり候へは、まなこ、みゝ、くち、した、

身のつみとかもぬしなくあとなく、なかるゝ

水のことく、こゝろとゝまるところなく、

なにのねんもおこさす、しつかなるところに

ひさをくみ、身をしつめ、いさゝかとりつく

ことなく、何こともいとふましきともおも

はず、身も心も大それのひさしくなり候へは、

あくも十二のつみもこんほんなきものにて

候へは、ほんなふもやかてほたひとなる、この

さんけをなし候へは、つまはちきするあいた

「(20オ)

にひやくまんをくこうのつみをのそき

てつくりおけるとかは、日に露しものきゆる

かことしといへり。とふていはく、二つのさん

けのうちには、いつれをなすへく候や。こたへ

ていはく、人のこゝろにまかすへからす。よろ

つ心のなすことにて候へは、むさうむねんかん

やうにて候。有さうにてねんおこり候事

も、こんほんなく心なしとさとり候はん。

ねんのあるもなきにて候。まことに身あり

て身につみをつくり、まことに心ありて、心に

つみをつくるとはおもふへからす。とふていはく、

せいくわんおこすとは、いかなることそや。こたへて

いはく、ほどけとなりて七世のちゝはゝ、六しん

けんそく、そのほか一さいしゆしやうあまねく

すくうへしとせいくわんをたつへし。たゝ身

ひとりのためをおもひて、こゝろせはくある

ましきことにて候。われをぬしにふして、ほう

かいさうもくまでも、わか身とおなし物に

しんせぬはわろく候。もろくのほどけの

くわんさまゝにありとはいへとも、みなこゝろ

のひとつをしらしめ、こゝろすなはちなるところ

ゝをしめさんためにて候。されはほとけのしよ

ふつのせいくわん、あまねくしゆしやうを此

たうにいれんととき、わかくわんまんそく

ともとかれたり。しやかほとけはしやうとをはたて

「(21オ)

「(20ウ)

すして、にこりある世にもろくのほとけのしやう
とよりしりそきすてられたるあくこうの

ふかきしゆしやうをすくふへしといふくわん
をたてたまひたり。これを十方もろくの

「(21ウ)

ほとけよのほとけのくわんよりもすくれたりと

ほめたまふよしをとかれ候なり。そのほか五百の
大くわんをはたてたまひたりといへとも、たしゆ

しやう一しんをしるみちにいらたまはんため

なり。とふていはく、ゑかうをなすとは、いかなること
そや。こたへていはく、一もんをよみしつぐの水を

そきても、あまねくほうかいしゆしやうにむけ、ひ

ろく心さすを、ゑかうと申。こゝろさす人のため
れうくをまいらせ、ともしひをかへけて、その人

ひとりとはおもふへからす。ゑかうのこゝろひろ
ければ、うくるくもおなし。大せんをなして

「(22オ)

もゑかうせはければ、りやくすくなし。すこし
のせんなりとも、こゝろひろくほうかいにゑかう

して、そむく心なく、する心なくあるへし。

世の中にいひならわせること、すなはちほとけ
のみにて候へは、おやにかうくに、よろつかん

ふんしてやはらかなるこゝろあるは、ほとけ

にて候、たし身はかりとおもふは、とつかくしんにて候。
おやもなし、子もなし、ほとけもなし、かみも

なしなとゝいふは、けたうあくまにて候。さ
とるうへにても、なをあるへきやうにおこない

「(22ウ)

なし候へは、あふらのたすけ、ひかりをますかことし。

とふていはく、りんしうのこゝろあるへしや。りん
しうにはあくまさまたけをなすと申へし。まの

見いれぬやう候はんそや。こたへていはく、りんしう

のかくこかんやうにて、さりなからさきの世の

むくひ、いまあらはるゝことにて候、いかやうのいん
くわにて、なにとしたる、しにをすへきことをしらす

候へは、たしへいせひこゝろにかけて、こゝろのみなもと

をよくしり候は、しにさまのことは、いかやうにも「(23オ)

候はんするも、いらさる事にて、さりなからたう
しんとなくし人は、そのときのゑんにひかる

ことなしと候へは、そのきわによしなきことをいひ
きかせぬなり。しうしんしうちやくのふかき事

候はぬやうにあつかうへし。りんしうのかくこと申

も、まへに申ことく、へいせひにかわらすなへの
ねんもなく、よろつ心をおかつやまひせめてつ

よく候ともわれはかりのみ、まことなからさる
こゝろたしほうかいにひとしくして、おにかめに

みゆれともおとろかす、ほとけみへたまふとも、
したかひ、よろこはず。たしの心もなくしていきの

こもるを、よきりんしうと申こゝろへわけたる

こともなければ、いかのちの世はあるへきとお
そるゝ心もなく、又ふつほうをわけてたれば、ちこくに

いるましきものとたのむ心もなく、いさかしう

しんもなく、さたまれるかきりをうとく思ふ

「(23ウ)

心もなく、たとへはみちのすちをふみゆくに、うしむまふみてとおれともすなはちたゝす、またたつとき人ふみてとをれともよろこはず、けからはしき物をちらせとも又きよく、かうはしき物をおとせとも、すないとひもせず、むさほりもせず、なにこゝろもなきすなのことく候はゞ、佛にて候。あくまのめみ入ぬやうしんもへちにもなく、たゞなにもこと一心よし物にうつりやすくうこく心候へは、てんまなふり候。いさゝかのこともまのわさにて候、何事をもおもはず。又何事もおもふへしともおもひ候へは、その心かおもふにて候ほとによるつ見すきかすして候かかんやうにて候。たとへはめに見え、みゞにきこゑ候とも、それにからかはず、あつかはずして、その心をおさむへきにて候。せんにもあくにもすきたるは、まのわさにて候、又をよはさるもまのわさふへてほとけてんまもしゆしやうもおなし心にてへたてなく候。とふていはく、何事もおもはずいたつらなるものをさてはよしと申や。こたへていはく、しん／＼なくてたうしんなくおろかなる人、さやうにいたつらに候みのりをも心にかけずして、いたつらなる人はかならず此世のことにしうちやくふかくして、みのりにものくさかるにて候。人めにはなにをなすことも見ゑず候はんすれとも、たうしんある人は心にうちおく事

「(25才)

あるましく候。しつかなる所にひさをくみ、心をしつめて何ともあてかひはからず、ねんなくして候はんことかんやうにて候。此世のことにひかれてひまなく候はゞ、日にいくたひもさためてかやうに候へし、なをもまきる事あらは、かやうにめに物をみ、おしくはしく、にくき心はいづくよりをこるととりつめて、御うたかひ候へし。又ねつおきつをきつとまりつ、する心なにもそのぬしはたれそととりつめて、ふしんして御らんし候はゞ、此こと御わすれ候はん。たちに御かくこ候へし。こうかにゆき、物をくひ候はん時もおこたらず。又きやうをよみ、なむしやかむにふつととなへ、なむめうほうれんけきやうとなへ候ともことなる心をましへす、しらすはからず御となへあるへく候。こゝろおこらすなにのねんも候はずは、そのめうほうれんけきやう、やかてほとけにて候、うたかひ有へからず。かへす／＼よきことに心をとめて、いたつらなるをよしと申候はんなり。されはほんなふをもいとはず、ほたひをもねかはす、何事もおもふましきともおもはず、はう／＼やみ／＼として、とりつくこともなくては、いかゝあるへきとうたかはす、すこしもとりつきもとめ候へは、そのねんにへたてられて、まことの心うせ候。まことの心はねんなきこゝろほとけにて候。とふていはく、きたうと申事も世のならばしに候へは、いかやうにして神佛

「(26才)

のこゝろにかなひ候はんや。こたへていはく、さきの世のむくひは、神もほとけもおさへてやふりたまはず。此ことほりをしりて、かなふましきをおろかにいのりのみちのこをいのるを、神も御よろこひある

「(26ウ)

なり。心たにまことのありてすくなれば、おのつから神と仏は水となみのことくにして、へたてなし、一つかみよろつの神にてまします、一さいの神一たいにてまします。ほんちはたゝ

一つなり。しゆしやうにゑんをむすはんために、さまざまのかたちとなり給ふ。されはとりけたものりうかめのなをうつし、山川くさ木のすかたをゑにかき、神にあかむることほうかいにあまねくして

もる事なきことほり、まへに申候。しゆしやうの心もほとけの心も神の心もかわるへからず。見る事をはなれ、きくことをはなれてしかもてんち

「(27オ)

にあらわれ、物いわすして草木くもかせにひとしくましますなり。しゆしやうの心のほかに神もなし、神をまつるはこゝろをまつるなり。心をおさめて心大そらのことく、しうしんしう

ちやくなく、心ねんなくは、わか心すなはち神なり、心のかみをまつるへし。とふていはく、仏の

中にはいつれをすくれ、ほさつの中にはいつれすくれ、きやうの中にはいつれをすくれたりとこゝろへ

てしんしたてまつるへきや。こたへていはく、一さいの仏ひとつほとけにて、ひとつ仏も一

「(27ウ)

さいの仏なり。くわこには仏、けんさいにましくほとけみらいにまします。仏なをかくすかたをあらためてかすくまします。その中にちかく世にいてゝみのをとき、此しやはせかいに

ゑんふかくましますしやか仏なり。われらしゆしやうのこんほんのしなり。こんほんの

しうなり。こんほんのをやなり。まことの仏のことは、まへにくわしく申つることく、しゆしやうの心に

あるなり。そのほとけはいろかんたちもなく、大 きにもなく、ちいさくもなく、くわこ、けんさい、みらい

もなく、こくうのことくにていたらすといふところなく、いきしにもなく、たつとくもなくい

やくもなし、これこんほんのほとけなり。此心をたにしりぬれば、わか心のうちにのこるほとけ

なく、ほさつ、もんしゆ、みろく、やくわう、くわんおん、ちさう、ふけん、そのほか一さいのほさつみなしんの

なにて候。しひふかくして世にいてゝしゆしやうのこゝろすなはちほとけなり。ほさつなりとしらし

めて、六たうをいたすへきためなり。されは一ほさつにてきにしかかひときにしかかふ、いつれ

おとりまさるとも申かたし。さるときは、しゆしやうも仏ほさつなり、まよふ時は、ほとけほさつもしゆしやう

なり。まことには仏もしゆしやうも、きのふみつるゆめのことし。かやうのことはりをときあらはしたまふ

を、一さいのきやうとは申なり。その中に三世もろ

「(28ウ)

くの仏、世にいてたまふこんほんは、一さいしゆしやう
ほとけとなるみちは、ほけきやうにて候、されはきやう
わうと申なり。此きやうのかんしんはめうほうにて候、
そのめうほうと申もこゝろの事にて候。おもひ
「(29オ)
はからず、ことはいはれず、こゝろのわきまふへき
みちもなき心のなを、めうとつけられ候。ほう
とはねんのことにて候、ねんと心はかわりなし。一
さいこゝろも仏なり。一さいのほさつも心なり。一さい
のきやうも心なり。たうのうちにしやかとたほうと
ましまして、ほけきやうをときたまひたるは、われら
しゆしやうみなほうかいのたうにて候。そのうちに
心とねんとあるを二つの仏とあらはしたまへり。
まことならざる身心をゆめまほろしとしりて
こゝろのうかふことみななくならは、さけにゑひたる」(29ウ)
人のゑひさめて、もとの心になるかとし。ねんく
おこたるは、ゑいたるゆへなり。ねんなくはもとのゑい
さる心なり。されはりうによはほけきやうをまひて
かみすちひとつひきゝるひまに仏になりしも、
はしめて仏になりたるにはあらず、もとの仏
の心にあることをあらはせり、まことにをどこ
おんなのさとありとおもふへからず。とちて
いはく、こゝろのなきをほとけの心とし、ねんの
おこらぬをよらいとうけたまはりて、又めうほうは心ねん
のことなりとはいはかゝ候や。こたへていはく、な
「(30オ)
にの心もなく、なにの身をもうけぬまへは、大そら

のことし。佛こゝろかりにちゝはゝのゑんにより
いんやうやわらきあひてさまゝのかたちを
うけたる、そのむねのうちにあるかとすれば、いろ
かたちもなく、なきかとすれば、おもひはかるこゝろ
おこるなり。ありともなしとも思ひはからざる
まことの心をしらしめんために、そのなをめうとつけ
られ候。その心はほとけのむねのうちに有ても、
たつとくもなく、しゆしやうのむねにありてもいやし
からず、さりもせず、きたりもせずもほんなふにも
「(30ウ)
けかれず、にこりにします、れんけのにこりたる
水のうちにありながら、にこりにしまぬにたり。
こくうのことくなるこゝろにくみいとをしき
しろしくろしをわきまへる心もおこり候。そのま
よいのねんはこほりのことく、ねんもなきこん
ほんのこゝろは水そ水のことく、まよひのこほり
とけ、人はもとの水にて候。かへすく、一しんのほかへち
のほうなく候。ねんをこると申候とも、心のほかならず、
心はねんのほかならず、こゝろひとつかほうかいにへむし
又ほうかいかこゝろのひとつにかへるにて候。いんくわも」(31オ)
二つあらず、たゝほうかいもひとつにて、ひとつの心
もほうかいとたしかに御さとあるへし。かゝみに
むかふとき、かゝみにうつるは、かけかゆきてかゝみの
うちにいるにてもなし、かゝみかみる人きたり
てうつるにてもなし、たゝをのつからたかひにう
つりうつすへきことはりなり。又月の水にうつるも

くたりてうつるへきとおもふ心もなく、水かそらにのほりて月をうつすへしとおもはず、をのつからなることく、こゝろかほうかにゆきて

ほうかいになるにもあらず、又ほうかいか心のうち
にきたりて、ほうかいにかこゝろにあるにもあらず、
おのつからたかひにをなしものなり。よろつかく
へつとおもふへからず。ちこくもしやうともおにも
神も、こゝろもはなれてはなし、めにみ、みゝにきく
ことのまことなると思ふゆへに、くりことな
からまたたとへをとりて申候はん、こんほんのひといふ
物は、ほうかいにあまねくして、心のことくいろいろ
なく、かたちもみへす、物をもやかす、あつくもなく、
いしの中にありてもくからからず、水の中に
ありてもきゆることなし。さりながらゑんに
あひて木の中よりもえいたし、石の中より
うちいたしたるひは、かりのひなるかゆへに、ゑん
なくしてはもゆることもなく、たきゝあふらの
えんつきぬれはきゑうせ候。此かりのひをのみ
まことゝ思ひて、まことのひはみゆることなし。かるか
ゆへに、しる人まれなり。そのことくかりなるいきしにをほ
めにみゆるまゝまことゝ思ひていきしにもなき
こんほんの心は、めに見へす、いろかたちなきゆへに、
しる人まれなり。いきしになく何のねんもなく
こくうのことくと申心はこんほんのひのことく、
ねんくおこるいとをしみにくみ、いきしに有心、

「(31ウ)

「(32オ)

「(32ウ)

ゑんによつてかりにあらはれ候。ひのことく、
かりにあらはるゝひは、こんほんのひのゆへにて候へは、
心もそのことくまことの心のゆふにてかりに
ねんもおこり候。しゆしやうの四よりあひて身と
なるとまへに申いたすと、水風もひのことく、こん
ほんのつち水かせは、めに見へす、いろもこゑもなく候、
かりにあらはるゝはかりなり。つち水ひかせにて候
ほとに、ゑんつき候へはなくなり候へとも、まことは
なくもならず候、めに見へぬ物は、そのまゝあり
ともなくなるをしらぬなり。あくこうほんなう
のねんはをこり候とも、たゝまことならず、かり
なるものなりとしんしてぬしにならず、
あとなくほうかいにひとしく心をもつへきに
て候。とふていはく、なにの心もなきやうにま
うねんをはらひ候とも、見ることきくことなく
候てはかなふまじきことにて候へは、そのゑんに
つれて心さまくにおこり候はんを、いかゝ
し候はんや。こたへていはく、こゝろにうかむ
ことうちはらひて何のねんもなきやうに
とゆたんなく候はゝ、をのつから御さとりある
へく候。たうしんうすきによりてこゝろにかけ
候はぬにつきて、申事もなく候。たとひめに物を
見るに、心は見る物にしうちやくせす、みゝに
こゑをきくとも、きくことにしうちやくせす、は
なにかをかくとも、かにしうちやくせす、心にさ

「(33オ)

「(33ウ)

ま／＼ねんありとも、二ねんをつかす、ねんをこるともそのねんにいろはす心うこかす、我心もとよりぬしなきほうかいにて、ほとけなりとふかくしんするかかんやうにて候。とふていはく、かやうにさま／＼うけたまはり候は、ほとけのをしへのよしにて候や。又わたくしの

「(34オ)

こゝろことはをそへられ候や。ほとけになるはなんきやうくきやうをつみ、かさねてこそほとけにはなるへき。やすくたゝなにの心もおこさす、わか身ほとけにて、こゝろのほかにほとけなしなどゝはかりは、ふしんにおほへ候。たしかにきやうもん候や。こたへていはく、なにの心もなきことはやすきことにてかたく候。又かたきにてやすく候。たゝたうしんのふかきあさきと、しん／＼のあるとなきとのかはりにて候。うたかはすしんすれば、やすくほとけになり、しんせすは、六たうをめぐりなかくくるしみにしつむへし。六たうの中には人とむまるゝことまれなれば、このたひむなしくすこしては、かいあるへからず。りうによは八つこなり、ちくしやうなり、女なれば五つの〇ふしんしてなむきやうくきやうしてこそほとけとはなるに、しんによのいちりとは、わかこゝろほとけにてほうかいなることなり。いちりをきく

「(35オ)

やかてほとけとなりしをうたかはしく申候へは、りうによにつめられて物もいはすしてしむ

したるよし、ほけきやうたいはほんにとかれたり。女人あく人へたてなくして、たゝしんほうかいなり。かはりなし。ほけきやうは、ほとけの御こゝろのまゝにていつはりなく候、うたかふものはちまんちこくに入にて候。しんのまよひ候は、

はちまん四せんのほうもんをしる人も、いたつらことにて候。一しもんたうをしらす、はれたるなかに候も、むねんむさうに候は、やかてほとけにて候。ほうもんをおしへんためにほとけは

みりをおほくときたまひたるにてはなし。たゝしゆしやうのわれならざるをわれとおもひ

てしうちやくふかくまことならざるをまことの心とおもひて、むまれしなざるをもむまれ

しぬとみる事、まうさうおほきゆへに、身にもとよりもちたるほとけとしらす、ちこく、

かき、ちくしやうにをつるをかなしみたまひて、まうさうをはらひてまことの心になして、

なにの心をもおこさせしかためなり。まことのことく」(36オ)

心さしられ、かくもんはいらぬことなり。なんきやうはなにのためになすへきや、女の身にてかくもん

をせず、さいかくもなしとかなしみもあるましく候。又かんやうはこゝろへすましたりともす

こしもまんする心もあるましく候。いくたひも申こどく、いさゝかもあてかいとりつく心にて、心を

うこかしねんをおこせは、ほとけの心に

そむくにてかやうに申は、ことくくたしかなり。
きやうろんのもんにて候。わたくしのこととはかと
御うたかひ候は、ほんのことくきやうろんのもん
をかきてまいらすへし。いかにもみちかく心へ
わけたまふへきとそんし候ゆへにやはらけて
かなにかきたるにて候。ゆめくかろしめうた
かいたまふへからず。ねてもおきても、わかふるま
いめうほうなりとしんして、此ほかにまたいかやう
なるたつときありかたきみのりやあるらん
ともとむる心もなく、かへすくなにの心もおこす、
なにのねんもをこさす、よろつしうちやくと、
まるところなく候は、その心すなはちほとけ
にてけんせあんおん、こしやうせんしよたるへ
きなり。あさことのかんきんのたひに、あひかま
いてく、御らんして此心を御さとりあるへく候。

「(37オ)

むそうは、御かたよりの文に、しゆきやうの
みちをたつね申させたまふに、御返事にいはく、
およそしゆきやうのみちは、一さいねんをきらい
て候。なにもなき心のをこらせたまひ候を、はらはんと
すれともはらはれぬを、いかせんとうけたまはり候。
たとへは、人のゆめにみちをゆくことを、やかてしつ
かにみんと申かことし。ゆめのうちにあゆめは、くるし
く候へともまことにあよはず、ゆめさめぬれば、
おもひをのつからとまり候。ねんのおこるといふ
も、又かくのことくにて候なり。心はこくうのことく

「(37ウ)

にて候。おこる物も候はず。ねんといふもたまりま
る人のみたりにおもひつけたることにて候。此ゆへ
にさとり候とき、一ねんもおこらぬ所をこそ
はしめてしり候へ。かやうに申ことなをも御ふしん候はん。

あさゆふねんのをこり候。やむ物とおほせあん
するまでも候はず。身のかたへうけたまひ候までも
候はず。ゆめのうちのいたつらことくおほしめして
すてさせたまひ候はんにしたかひてけふみんは
はれ候へし。いつるゆめのさむへきゆめはいかにとして
かさむへきなどおほしめし候はんをみなく、
ゆめとおほしめしてすてさせたまひて、よろ
つゆめとおほしめし候ところをまことの仏
法とはをほしめすましく候。ともかくも心ゑぬ
所にしはらく御こころさしをさつて御
らん候へ、まよひの心をもつてとかく御あて
かい候は、いよくさまよひあるへく候。たとへはさけ
にゑいたる人のおもひ思ふことはみないた
つらことにて候かことし。たとへはゑいかさめ候はね共(38ウ)

「(38オ)

われらはさけにゑいたりとしり候へは、あやまり
をはせず候。たとへはあさゆふつきそひ候はす共、
御しやきやう候は、ありかたき御ことなるへし。
ほとけもしゆきやうをすて、かくれさせたまひし時も
又いてさせたまふ時も、御りやくのためにて候なり。
うちすてまいらせ候ことも、御うらみあるましく候。
これもはからふむね候ほどに、かやうに御ゆめのさ

めさせたまひ候はぬほどに、かゝるわかれかいらへし。

御しゆきやうにて、御さとりをひらかせたまひてあふとわかれのへたてもなく、とをきちかきのはりはあるましなど御返事をそてに御ひき

「(39オ)

てつねに御らんして、たとひつきまいらせ候共

これにはすましく候。つくくしやうしりんゑのゆらいをたつぬるに、うさうしやうやくの

まよひよりおこり候。わつかにせけんにしやう

やくする思ひをひるかへせは、又ふつかいにちやくするとかをなす。これひとへにしんのめうりと

しらするゆへに、みたりかはしくせんあくの

きやうかいにしたかふ。しかるに、此心は一さいのさうをはなれて、まんほうのこんけんを此心に

「(39ウ)

おこるところをねんといふ。此ねんよりすな

はち、せんあくのあひわかれて、十かいともにをこる

せつしやうをおかせは、ちこくにおつ。けんとんの心をおこしては、かきとなる。くちにしては、ちくしやう

となる。はらをたてゝは、しゆらたうにをつ。五かいをたもては、人けんにむまれ、十かいをしゆしては、

てんしやうにひする。これを六ほんかいといふ。

したひをさととりては、ゑんかくとなる。六たうをきやうしては、ほとけとなる。これを四しやう

かいといふ。これすなはち十界なり。此一ねんを

「(40オ)

ともにとるへきかたちもなく、みるへきいろもなし。おこりみたるはしめもなし。さりて

とゝまるをはりもなし。ちうけん又ちうしうなし。されは、ねんよりおこる所のゑしやう

又かくのごとし。六ほんかいもまことになければ、いと

ひすつへきところもなく、ししやうかいもまことなれば、ねかひもとむところもなく、たとへは

大そらに雲のあるかごとし。水のうへのあわに

ふたつおこる所の一ねんむなしきかゆへに、

なすところのまんほう、ことくなきなり。まん

「(40ウ)

ほうと一たいにてみなくうしやくなり。此時みなくうしやくしよゑんのきやうとなる。みる所

のしよゑんの心となる。しよゑんのくうかさねて

うせぬれば、うゑんの心またむなし。のうしよせつして此せつまたくゝとゝまらず。かくのごとく

なりぬれば、しやうしあとをつけり。ほたひいま

のあたになり候なり。とんしやうほたひのみち、此ほんもんにしき候はすなり。

むそうの御うた

おもへともかなはぬことはねかひ入てすつるにやすき世をはいとはす

あるにうはう

させんの心をとい申けるに、三てうとのゝ返事をしへぬに、をかわれとこゝろへて、こひをは

人のならふ物かな

又むそうの御うた

なにこともまことはさらになかりけりよろつはゆめのかりの世の中。それさせんのしやうと

「(41オ)

いふは、ふかくしんくをおこすへし。たとへは、
いゑをつくるに、しんを地として心さしをは
しらとしてし、ひをなし、ねんくくに
しやうしてかきとすへし。しひなき人のいゑ
なきかことし。ゆへいかにとなれば、まつ五かいの
はしめに、せつしやうかいを第一とす。此せつ
しやうかいは、しひなきゆへにつくるこゝなり。
いきとしいけるものは、せんせのきやうたいしやう
くのちゝはゝなり。一さいの物をわかおや
このことくをもはんにかてかころさんと
おもふこゝろいてき候へき。しかれば、せんこんの
みなもと、しひをもつてむねといへり。しひあ
るときは、一さいのにくき、いとをしきのあひへ
たてあるへからず。しかれば、させんしゆきやうのみ
なもと、しひあるものはほとけもあわれみ、神
もなふしうをたれたまふ。しんくのかうへに
は、一さいのふつほさつやとりたまふとみえたり。
しひたうしんあれば、心もやはらき、しゆしやうの
心さしなくありて、むねをあきらめんこと
うたかひなし。たとへはきやうにさとりおかす
とも、ゆめにもたいくつの心をおこされは、し
ねんにこうつもりて、月のくもを出るかことし。
ゆめのさむるかことし。はちすのひらくかことし。
さとりをひらかんことうたかひなし。此時に
いたりて、きらうへきねんもなく、さとるへきほう

「(41ウ)

もなく、あきらむへき心もなし。まよへるしゆ
しやうもなく、さとれるほとけもなし。これを
又あんらくのところともいふなり。此時とかと
おもひしねんも、へちのものにもなきなり。此
心はもとよりさいけしゆつけのかはりもなし。
五しやう三しやうの女も、心のほとけなく、十
あく五きやくのさいそくもほんらいのめんもくは
さはりなし。させんしゆきやうのことくによらずは
いかてかかくのことくのりをあきらめん。むね
たへたらん時はほうとしやうふしやうふめつの
ほとけなり。此ほとけあきらめんことさせん
にしくへからず。

むそうの御うた

「(42オ)

まかすればおもひもたえむ心なりしめてそ
世をすつへかりけり。むそうこくしのほうこ。
させんと申は、ことのゑんにしたかひて、おもて
をかへ、よるひる心にをこりさるなものしに
をたゝかふかことし。やむことなくおこる。せん
あくのみなもとをしつかにわか心をちらさす
して、くわしく見るを、させんと申なり。されは
此ねんをしつかに見候へは、此一ねんまことに、は
しめなくおほりもなし。おきふし此ねん
つきぬあいた、これをたねとして、ちこくにおち、
此ねんのみなもとをみあらはし候へは、ちこく
六たうなし。此一ねんはわれもとよりくそくす

「(42ウ)

「(43ウ)

る。ほんふのふつしやうなり。されは、此ほんしんすなはち、こくうとひとしく、しやうはこくうとおなししやうなり。此ほんふのわれらかもとよりのふつしやうのかたちにて、此ねんあり。

「(44オ)

されはしゆしやうと申は、一ねんのなみにおとろきて、もとの水をわすれたることし。此ねんのさるにほたされて、ほんふのふつしやうをまうねんのくもにつゝみみへすして、てりあきらかなる月のくものうちにかくるかことし。さるあいた、一ねんにしたかいてむまれかへくするをりんゑのこうとは申なり。くるまのめくるかことし。そのうちに、人のせん人あるにてうせきふるまいなすよりは、たゝふたんにをしく候へは、ちこく」

(44ウ)

のくなり。さて六たゑるてんのたねとなるなり。されは、しつかにわかまうねんをとゝめて此一ねんいつくよりおこるそと見候へは、ことのゑんをたねとす。わかふつしやうはかけをうつさぬかゝみのことく、くもなきそらのことくもとより水になみなけれとも、かせをゑんとす。くもおほへは月にとかなけれとも、月のひかりしはしかくるゝかことし。かゝみにとかなけれとも、人のおもてをかけとす。たゝ人の心こそかゝみなれ。わかねんなし。あさゆふせけんのきやうかいことのゑんをねんと申なり。されは、かゝみにかけあり。月にくもあり。水

「(45オ)

になみあり。われにきやうかいのねんあり。くもはなれて月のとかりあり。なみおさまれば、水しつかなり。あひせすはかゝみにかけなく、されは水になみなくして、かゝみにかけとゝまらず。われもねんとゝまらずして

月のやとり、われにねんなければ、心のほどけあらわるゝまことのもろくのまうねんおさまれば、わか心のうちに三世のしよふつ八

「(45ウ)

まんのしやうきやう、せかい、こくと、みなくわこ、けんさい、みらい、三世ものころとこなし。わか心のうちにあらはれおさまるなり。かくのこことくの人ふしきにもなし。しつかにかたときもさせんをしてみよ。わかまうねんをとゝめてせんをもおもはず、あくをもおもはず、せけんのわさをもしはしおくへし。たゝわかふつしやうはかゝみのことし。月のことし。ちゝはゝのはらにやとりさりしそのやかて

「(46オ)

まうねんむなしくなり候なり。もとよりのほんしんあらはれぬれば、しはし此所にけんしやうとなつく。たゝかゝみをとくかことし。此ところいそきくちしきとたつぬへし。かやうのところよりしやに入、しやうに入申なり。しやとはあしきこと、しやうとはすくなるところなれとも、われともちいぬれば、しやとなり候。せんあくなし。しやしやうなし。むかしなし。いまなし。

わか心のあらぬさま、さかしくなるをも

すてにほとけをみいたし、みのりをみいたす
はみなくしやにいり候。かまへてくさとり
をもたすして、わか身のまよひをなすへし。

「(46ウ)

たゞいまをさすかことし。此ほうをきくより

していのちのあらんほとは、かまへてくさるとまると

ところなかれ。あひするところなくさせんを
するともせず共、わすれたり共にもおもはずして

三さいのおさなきものごとくして、せんあ
くばんじふんへつすることなかれ。あなか
ちに人にもとはずして、させんをきひしく

まほり候もあやまりなり。たゞしやうしうさ

「(47オ)

くわにかた時もわする事なかれ。まつほと

けはむしんくうなり。しやしやうはねんによりて
六たうにるてんするなり。一さいうゐのほうは
みなゆめなり。むいのほうといふは、むまれもせ

す、はしめもなく、おほりもなし。月日の

ことく人ことにむゐのほうはくそくせり。これを

ふつしやうとなつくむまれたるかたちは、うゐ

のほうなれとも、心はむゐのほうなり。かたちにて

やふれ、てうるい、むしけら、けたものまでも

むまれて、六たうをめくれとも、まことにふつしやう
のこゝろなり。されは、むしけら、さうもくに

いたるまでみなくそくせり。されはしん

ちうまんせうみなくほとけのしんたひなり。

さて此させんはこゝろしつかなれは、たとひと

のゑんによりてねんおこれとも、一ねんを

つかされは、ほのうゑにゆきのふるかことし。又

おこらさるところもよろこはず。此ねんのをこるや

まひつかさるはくすりといふやまひをしりて

ねんにねんをつくへからず。よろつものゝきて

まなこに見へ、みゝにきこへ、はなにいり、くちにいはれ、

こゝろにおもはるゝともやかてわすれよ。又かやうに「(48オ)

申候へとも、此ねんあしくおもふへからず。大

そらのくものごとくくもれともまらず候へは、

ねんなし。ふたんわか身をよその人のこ

とくにして我身にぬしなし。ふんへつ

なし。むかしなし。いまもなし。したしき

もなし。われもなし。いかなれはといへは、

わか身に一ねんもなくして、とかくいろこの

まされはもとよりまんほうこのます、うせず

いてこす。山はもとの山、水はもとの水なり。

ひはあたゝかにして、水はすゞしくして、しやう

あつくなし。かくのことくあるをしりつれば、

わか身の心はともになかりけりとしりて

よろつ事をしらするなり。たゞやかたの

ことくありて、いゑぬしはいてゆく、わかやと

はかりあり。ぬしにいろかたちなれとも

ある時とやかたをはなれてゆめをみる。し

らぬ所にありきさまよふなり。かうは

「(48ウ)

ありけとも、こゝろはゆかす、とゞまらず。ねす
おきす。物にけかされす。さうして物をもお
もはず。しらするところなり。しやか、たるまとも
これをなつくるなり。さとの時は、ちこくせ
かい六たうもなし。たゞかけをうつさぬかゝみ、
くもりなきそらのことく、ゆめにこくうの
へたてなければ、ふつほうせほうふつしやうわれ人
もろくのまんさう、みなほとけなり。いそき此
いはれをしりたまへ、しやしやうのところをみすて、
ほんふのふつしやうをあらはすへし。人のいのち
つれなしといへとも、いつるいき入いきをま
たす。あすをたのむことなかれ。いそき人く
りんしうの時とて、へちにあるへからす。しせん
たうらいしぬれば、たゞへひせいの心さしをは
ゆかすさとらすして、人のゆめをみるかことし。ゆめを
見るにそのさまかはらず、たうせすものにつけ
かされすとして、此やとをすつるをなつて
りんしうといふ。しかれば、ほとけのたまはく、
あしたに此ほうをきくゆへにしすと、この
ほうにはかなふなりとのたまへり。心さし
ふかければ、ひさしからす。みのりと申は、人
のこゝろをたねとして、よろつの事を
うちすてゝきはらず。すてすてす、とられ
す。あひせす、にくます。そうしてむまれこ
のことくしてよろつの事にいろわすうし

「(49オ)

ろなき身なり。さる人のいはく、ほとけは
たゞ我おすところなり。まつたくほかになし
といふ共、せんの時はおひかまへて候。心の
ねんみたれすといへとも、心さしあらん
人にはとひたつぬへし。すゝむことをもせず、
しりそくことをすつへしといへり。けふ
あすかと此身をたのますして、いそき
くゝわするゝことなかれ。

「(50ウ)

「(49ウ)